

# カムパネルラ

～カムパネルラとは～

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.20

2011年1月号

こわいけど読んでほしい絵本・・・越中 康治  
橋を渡る・・・藤田 博  
読み聞かせから「読書ゆうびん」へ・・・佐藤 浩一  
「はじめて」のドキドキ感を思い出させてくれるこの一冊・・・松原 希  
新刊紹介・・・藤田 博

## こわいけど読んでほしい絵本

越中 康治

かわいく見えないこともないけれど、大人になった今でもやっぱりちょっとこわい気がするのが、この本の表紙のこのおばけです。せなけいこの『ねないこだれだ』をはじめて読んだのはいつだったか、どうしてこの本をこわいと思うようになったのか、今となってはまったく思い出すことができません。それでも子ども心に何となくこわいと思って以来、私の心の中では、そのイメージが今日まで持続しているようです。この何となくこわいという思いは、「夜中にあそぶ子がおばけにされて、おばけの世界に連れていかれて、それでおいしい」というストーリーによるものなのか、このちぎり絵がもつ不思議な力によるものなのか、それとも...



ちょっとこわい本だと思いつつも、私はこれを生まれたばかりの娘にプレゼントしました。正確に言うと、娘が生まれた当時住んでいた山口県防府市の社会福祉協議会からいただいた（妊娠届出時に複数の絵本の中からほしいものを二冊選んだら、生後それを母子保健推進員が届けにきてくださった）のですが、いずれにせよ私たち親から娘にプレゼントした最初の絵本です。私たち親は、それこそ首がすわる前から、娘に何度もこの絵本を読み聞かせました。娘は最初はぼんやり眺めているだけでしたが、やがて自分から絵に手を伸ばしたり、ページをめくったりするようになりました。

そのうち這ったり歩いたりするようになると、娘は読んでほしい本を親のところへもってくるようになりました。幼い娘にも好みがあり、その好みも時々で変わりましたが、『ねないこだれだ』は特に気に入りの一冊のようでした。何度も何度も読み聞かせているうちに、私たち親はまもなく暗唱できるまでになってしまいました。娘が1歳を過ぎた頃からは、おばけの雰囲気を出そうと、妻が声色や表情など、読み方にも工夫を凝らすようになりました。娘は妻の迫真の演技に驚き、顔を強張らせつつも、こわいもの見たさで繰り返し、多いときには20回以上連続で読み聞かせをせがみました。

娘が1歳半を過ぎた頃、妻の演技はおどろおどろしくエスカレートして最高潮に達したかに見えました。そんなある日、「こわいけど読んでほしい」という恐怖と期待の入り混じった感情がついに均衡を失ったようで、娘は本の表紙を見ただけで泣き出してしまいました。それ以来、自分からこの本をもってくることは皆無となり、私がやさしく読み聞かせようとしても怒って本を払いのけるようになりました。もうすぐ2歳を迎える最近になって、私がひとりで声に出して読んでいるのをちょっと遠巻きにのぞき込んだりするまでに回復しましたが、この本がこわいという思いは決定的になったようです。

かわいく見えないこともないけれど、大人になってもやっぱりちょっとこわい気がするのは何故か。うちの娘が大人になった時には、幸か不幸か、その理由をはっきり教えてあげることができます。

「ねないこだれだ」せなけいこ作・絵／福音館書店

（学校教育講座）

こちら側とあちら側、橋は二つの世界をつなぐもの。橋が出会いの場所となり、運命を変える場所となるのはそのためと言えます。

長崎源之助作・鈴木義治絵『つりばしわたれ』（岩崎書店）で橋を渡るのは、東京から一人、おばあさんの家にやって来たトッコです。山の子どもたちが、「やーい、もやしっ子。くやしかったら、つりばしわたって、かけてこい」と、トッコをはやし立てます。仲良くなりたい気持ちがありながら、村の子どもを突っぱねてしまった結果です。さびしさのあまり、病気の母のいる東京の方に向かってトッコは叫びます。声がこだまとなって返ってきます。トッコの前に、かすりの着物を着た男の子が現れたのはその時です。「おかしな子ね」とトッコ、「おかしな子ね」と男の子。男の子がつりばしを渡ります。トッコもその後をついていつの間にかつりばしを渡っていたのです。揺れるつりばしを渡って向こう側に行けたことが、トッコの成長の跡を示しています。「おめえ、つりばしわたれたから、いっしょに あそんでやるよ」、山の子からはそう声がかかります。



トッコの前に現れた男の子は誰だったのでしょうか。母親が姿を変えたもの、トッコを思う母親が遣わしたもの、もう一人の自分が現れたもの、いくつもの解釈が可能です。確かなのは、それが橋という境目に現れたことなのです。



三びきのやぎが山へ向かいます。山で草を食べ太るためです。それには、下に魔性のものトロルがいる橋を渡らなければなりません。橋という境、その下に棲む魔性のもの、マーシャ・ブラウン絵・瀬田貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）の始まりです。「ちいさいやぎのがらがらどんが・・・かたことかたこと」、つづいて「二ばんめのやぎのがらがらどんが・・・がたごとがたごと」橋を渡ります。昔話に広く見られる「三」のパターンです。繰り返しのリズムが作り出す、一、二、そして、三、三で変わることに期待がそこから生まれます。その多くで、三は一番年下の小さなもの、力のないものの形をとります。長兄、次兄が打ち負かされ、飲み込まれた相手を末の弟がやっつけ、退治できるのは、小さくとも、もしくは小さいからこそ知恵を持っていることによります。それがここでは違っています。渡るのは小さいやぎから。大きいやぎがトロルをどうやっつけるか、考えられる二つの方法の一つ、力のあることが選択されているからです。知恵比べより力比べ、ちぎっては投げ、ちぎっては投げの世界に拍手喝采することになるのです。

きつねとうさぎ 食べる、食べられるの捕食関係にある二匹が橋を渡ります。追いかけられるうさぎが先、追いかけるきつねが後なのは言うまでもありません。「ここをわたって まるたを おとせば にげられるぞ」、うさぎが思います。「このまるたを わたらせなければ つかまえられるぜ」、きつねが思います。二匹がそれぞれに喜んだその時、丸太の橋が傾き始めます。あわてて後ずさりするきつね。うさぎをつかまえようとすれば、バランスが崩れ、橋は傾きます。シーソーのように揺れる橋の上で、きつねが「ちょうど つりあいの とれるところを さがした」のは、自分の命がかかっていることから当然です。そうしなければ、うさぎもろとも深い谷に落ち、谷川に飲まれてしまうことになるのです。「ゆらゆらばし」が作り出したのは、文字通り支え合わなければならない状況、「でも なんか へんだよね。さっきまで ぼくを たべようとしてた きみが ぼくに いのちを だいじにしるだなんて」、「いまは おたがいの おもさが ないと こまるんだよね」うさぎのことば通りの状況だったのです。



橋がぐるぐる回り出したことで、ようやくその一方が岸に届きます。うさぎがきつねの背中をぴょんと渡ります。うさぎの手につかまって、きつねも土手にはい上がります。上がるとすぐにうさぎを追いかけ始めたきつねは、「おっと おれって こわかったあとは おしっこ するんだっけ」、そう言って急に走るのを止めます。それをどう受け止めるかは、きつねとうさぎが今度出会ったらどうなるかの答えを考えることと一つです。橋の上で生まれた二匹の友情関係は、橋の上だったからのことと考えるか、持続すると考えるか きむらゆういち文・はたこうしろう絵『ゆらゆらばしのうで』（福音館書店）が問いかけているのはそれなのです。

「つりばしわたれ」長崎源之助作・鈴木義治絵／岩崎書店

「三びきのやぎのがらがらどん」マーシャ・ブラウン絵・瀬田貞二訳／福音館書店

「ゆらゆらばしのうで」きむらゆういち文・はたこうしろう絵／福音館書店

「今日は絵本を持って来たよ。」

「えー？絵本？」

小学6年生の頃のことである。担任の先生が絵本の読み聞かせをしてくれた。(6年生にもなって、絵本なんて...)当時の私、というよりも、おそらく学級のほとんどの友達がそう思っていた。

読み聞かせが始まった。鉛筆だけで描かれたシンプルで小さなイラスト。繰り返しの表現。ストーリーもいたって明解な絵本であった。しかし、登場人物のあたたかな会話とリズムカルな言葉のひびき、そして何より楽しそうに読んでくれる先生の表情に、いつの間にか教室中が絵本の中に引き込まれていた。私にとっての思い出の絵本、『ねずみくんのチョコッキ』との出会いである。



当然のことながら、読書量や選書傾向は子どもによって異なる。子どもと本との出会い方にはさまざまな形が考えられるが、現在担任している2年生の子どもたちに、さまざまな本と向き合う場をつくり、読書の幅を広げるきっかけを与えることができればと考えながら日々の授業にあたっている。

「お手紙」(アーノルド・ローベル作 光村図書2年下)は、少しわがままで自分勝手ながまくと、行動的で優しいかえるくんのほのぼのとしたやりとりが描かれた物語である。

子どもたちには、音読を通して互いの理解を確認し合ったり、気付いたことを音読に反映させたりしていくことを通して、ながまくとかえるくんの気持ちの変化に気付いたり、友情の深さに浸ったりさせながら、物語の展開に即して変化していく場面の様子をつかむ力を定着させたいと考え授業を行った。

単元の最後に、ながまくとかえるくんを描いたアーノルド・ローベルの『ふたりはともだち』を紹介した。少々小さ目の体裁の絵本なのだが、子どもたちはみなじっと挿絵を見つめながら読みを聞いていた。「お手紙」の学習を通して、ながまくなやかえるくんの気持ちを読み取ってきた子どもたちにとって、二人のやりとりは、何かすっかり馴染みのものになっているようで、相変わらずマイペースながまくの言動に、「しょうがないなあ。」「ながまくらいいねえ。」と微笑んだり、ながまくの言動を受け止めるかえるくんには、「かえるくんはながまくのことを本当に分かっているんだね。」「さすがかえるくん！」などと納得したりしながら物語を味わっていた。その後も図書室で同じシリーズの本を借りる姿が見られるなど、学習を通して登場人物への親しみを深め、他の作品へと関心を高めていくことができた。



また、「名前を見てちょうだい」(あまんきみこ作 東京書籍2年下)では、図書室を活用し、自分が選んだ物語のおもしろいところや好きなところを紹介し合う「読書ゆうびん」の活動を行った。「名前を見てちょうだい」は、主人公えっちゃんが、風に飛ばされてしまった帽子を追って不思議な世界を冒険する物語で、子どもたちが自分と主人公とを同化させたり、応援する気持ちをもったりしながら楽しく読み進めることができる作品である。学習を通して、心に残った言葉やおもしろい場面などを交流する楽しさにふれさせることで、読むことの楽しさを味わわせ、読書への関心をより高めさせていくようにしたいと考えた。

「読書ゆうびん」の活動では、子どもたち一人一人に図書室にある絵本や物語の中から1冊の本を選ばせ、その紹介文を手紙形式にまとめさせた。子どもたちは、自分の好きな物語を友達に紹介することによって、相手意識を明確にして物語のよさを改めてとらえ直すことができた。同時に、友達の紹介する物語に関心をもち、その本を実際に読んでみるなど読書活動の広がりも見られた。

子どもの提案で、学級の2学期の係活動に新たに「絵本係」が加わった。係の子どもたちは毎週図書室から何冊かの本を選び、帰りの会で紹介したり、子ども同士で読み聞かせの会を開いたりしている。また、授業の合間などに読み聞かせができるよう、学級には学級文庫を設置している。書店で目に留まった絵本を買い集めるうちに少しずつ絵本の本数は増えてきている。もちろんその中には、私にとっての読み聞かせの“ルーツ”とも言える『ねずみくんのチョコッキ』シリーズも並んでいる。

「ねずみくんのチョコッキ」なかえよしを・作/上野紀子・絵/ポプラ社

「ふたりはともだち」アーノルド・ローベル・作/三木卓訳/文化出版局

(附属小学校教諭)



## 「はじめて」のドキドキ感を思い出させてくれるこの一冊

ゼバスティアン・メッセンモザー・作 / 松永美穂・訳  
『リスとはじめての雪』(コンセル)

松原 希

冬が近づいたある日のこと、「ふゆっていうのはね、とってもきれいなんだ。雪がふってきて、なにもかも まっ白になるんだ！」リスはヤギから雪の話を聞きました。冬の間眠りつづけるリスは、雪を見たことはありません。「こんどこそ、おきていよう。はじめての雪がふって、ふゆが やってくるまで！」リスは、何度も眠りそうになりながら冬を待ちます。



リスが冬を待つのなら、ハリネズミだって眠るわけにはいきません。ハリネズミも冬を知らないのですから。「ぜったい みなくちゃ！」二匹でいれば見逃すはずはありません。大声で歌って眠気を吹き飛ばします。その声に誘われてクマが現れます。冬中眠っているクマも、まだ雪を見たことがないのです。

しろくて、しめっぽくて、つめたくて、やわらかい ヤギは雪をそんな風に言っていました。でも、三匹とも雪を見たことがないのです。「はじめての雪」はもう降っているのかもしれませんが。「すぐに雪を さがさなくちゃ！」三匹は雪を探し始めます。

ハリネズミが見つけました。「白くて、しめっぽくて、つめたいもの これが はじめての雪だ！ もし これがたくさんふってきたら、ふゆは どんなにきれいだろう・・・」そう言って持ってきたのは、ハブラシです。つづいてリスが見つけます。「はじめての雪だよ、みつけたんだ！白くて、つめたくて、このなかは けっこうしめっぽいわ。ふゆは どんなにきれいだろう・・・」持ってきたのは、空きカンです。クマも見つけてきます。「これがはじめての雪だよ！」手に持っていたのは、靴下でした。三匹が雪を見つけることはできるのでしょうか。

この絵本では、見たことのない「雪」を心待ちにする動物の様子が、生き生きと描かれています。「雪」への大きな期待と少しの不安。「はじめて」が、その気持ちをなお一層かき立てます。

冬の訪れを告げる初雪。初雪を見ると心躍るのはなぜでしょう。忙しい足を止め、空を見上げ、手をかざしてしまうのはなぜでしょう。雪の白さ、純粋さが心を引きつけるのかもしれませんが。そうだとすれば、心もまた純粋だからということになります。その純粋さを忘れることのない大人であり続けたいと思います。

(英語コミュニケーションコース4年)

## 新刊紹介

斎藤惇夫『哲夫の春休み』(岩波書店)

父の故郷、長岡へ向かう列車の中で、哲夫は同じく長岡へ向かう順子(なおこ)と出会います。その車中で時間の揺れ、切れ切れの形でのタイムスリップ(こちらが向こうの世界に入り込むのではない、向こうの世界のものが幻となって現れるこれをタイムスリップと呼べばということ)が始まるのは、順子のためと言えるのです。順子は哲夫の父の一つ下、同じ学校に通っていた同窓生、そして、みどりの母です。哲夫は12才、4月からは中学生に。その哲夫の、春休みを利用しての一人旅です。春休み、12才、時間を飛び超える要素はそろっていることになります。「春休み」には、時間の止まった休暇の意味が、円を象徴する「12」には円環の時間が示されているからです。



長岡に着いた哲夫は、父の住んでいた家の跡を訪ねます。「あなたを待っていたのよ ずっと ずっと待っていたの。」とのささやき声が聞こえてきます。見えてきたのは、子どものときの父。そこにあるのは、目の前にいる小さな男の子が自分の父である奇妙さです。見覚えのある時計を目にします。「お母さん」のその時計は、浦和の家のおばあさんのもの。「おばあさん」が焼いた栗を口の中に入れてくれます。その甘い香りが口に残ります。

哲夫とみどりが信濃川の土手を行きます。強い風が吹きつける、その時二人が見たものは、岸边で遊ぶ幼いころの哲夫の父の姿です。流れつづける川が、時間を後戻りさせる形で見せてくれたのです。

雪の積もった神社の参道、その石段を順子と哲夫とみどりが上ります。雪は積み重なる時間の象徴と同時に、めぐり来る時間の象徴です。順子は長岡で過ごした十代最後の春休みへと戻っていきます。「あの時」を追体験する母、その若い母がみどりの目の前にいるのです。幼い父を見る哲夫、若い母を見るみどり、哲夫の時間の中にいる父、みどりの時間の中にいる母、そして、その逆、含む、含まれるの関係が見えてくるのです。

「ガンバの冒険」シリーズの三作目『ガンバとカワウソの冒険』から28年ぶりの作品です。川を遡るガンバとカワウソ。そこでの「大川」に重ねられていた故郷、長岡を流れる信濃川が、ここでは真ん中をとうとうと流れているのです。

(藤田 博)

発行: 宮城教育大学附属図書館